

R18 左馬一、銃二 同一設定詰め合わせ

caution

この作品はヒプノシスマイク非公式ファンブックとなります。

碧棺左馬刻×山田一郎と入間銃兎×山田二郎のcp本です。

普段はあまりないcpをメインで取り扱っていますが、一番好きなcpのため筆を執らせていただきました。。
なかなか書かないサマイチと銃二のため、口調がおかしかったり、こんなこと言うかしらということがおそらくあります。それでもいいよという心お優しい方のみご覧ください

当作品は以下の要素を含みます。

攻めor受けの自慰行為

オメガバース要素あり

左馬刻→α

一郎→Ω

女モブあり（もう1個の無配と同じ）

左馬一（バチバチ期）

寂雷さんが渡してくれる抑制剤と、何故か左馬刻が番関係を解消しないお陰で、ヒート中も悪化することがなく済んでいる。命令のように送られてきた手紙には第一回ディビジョンラップバトルの告知が入っていた。

左馬刻に会ってヒートが悪化するわけにも行かない。それに、気になるメンバーも候補も居ない。イケブクロは新メンバーを集めることが出来ず、別チームが出る...予定だった。

どこから聞いたのか第2人が新メンバーになりたいと言ってきたのだ。そして、見事メンバーになった。

そして、見事に中王区の前で遭遇してしまいヒプノシスマイクを向けたのが、今週。そのステージでヨコハマに負けたのも、一番見たくて見たくなかった左馬刻の負けを見たのも今週...何なら今日だ。

明日には中王区を出ることになるが、その前にやらなきゃ行けないことがある。そう意気込んでいると、部屋から手が出てきて、中に入れられる。

「軽率に廊下を歩くと、面倒なことになりますよ」

「...入間さん」

「左馬刻のところに行くんでしょう？」

「っ...止める気か？」

「いえ。あなたが見えたもので、部屋に行くなら必要でしょう？コレ」

「...何が狙いだ。」

「あなたとの対戦前日に、あいつが部屋に閉じこもったので、外に出たところ一郎クンの弟さんたちと揉め事になりました」

「...は？」

「それで、中王区から左馬刻の部屋の合鍵を貰ったんです。あなたに貸し出そうと思ひまして」

「何が狙いだ」

「ふうー。今回、麻天狼に負けたのは私たちが左馬刻やあなたがたリーダーに力が及んでいなかったのも当然あります。しかし、最終バトルあいつは本気のつもりだったが、本調子では無かった。」

「どういうことだ？」

「あなたと戦っているときの左馬刻と、かなり違ったように見えました。あなたがたに何があったかは知りませんが、これから第2回、3回と続くでしょう。このまま、あいつがあなたと戦った時の調子を取り戻せなければMTCに勝ちはないでしょう。単刀直入に言うと、話し合いをしていただきたいのです。」

「は？俺は...」

「イケブクロの領地を守りたいんでしょう？協力していただければ、私からも掛け合ひましょう。」

「...っ。」

「信用していただいて構いません。左馬刻は、裏切りが嫌いなのは変わってませんから。」

「...わかった」

「あ、言い忘れてました。」

「なんだよ」

「部屋に連れ込んだのは私ですが、内密にお願いします。」

「？？...分かった。」

そういい一郎が部屋を出る。閉まる前に、命が惜しいですからと呟いていた気もするが、何の話か分からなかった。左馬刻と喧嘩になっては意味がないので、音を立てずに合鍵で中に入る。以前、部屋の明かりが消したはずなのに帰ってきたら消えてなかった、中に人がいるかも

しれないからという依頼で音を一切立てない方法もコツも分かってる。中に入るとシャワーの音が聞こえる、風呂かと思い、部屋の中に入ろうとする。

「っ...」

シャワーの音で聞きにくい、苦しそうな声が聞こえる。もしかして悔しくて泣いてるのだろうか？それとも具合が悪いのだろうか？ドンツという音が聞こえる。前者なら部屋に居る時点でマズいが、具合が悪いなら大変だ。本調子じゃなかったのも体調が悪いとしたら...そう思いお風呂場に近寄る。声を出そうとしたとき、とんでもない声が聞こえる。

「は...っ...」

口をバツと抑える。こいつ...おなってんのか。俺が昔フェラしたときなどに聞いていた俺の一番好きな声。俺でも気持ちよくなってくれているという声。それが嬉しくて、左馬刻が言うとおりに覚えた。そしたら、愛しいという顔で頭を撫でるんだ。胸がバクバクして息が荒くなる。胸を反対の手で音が聞こえるなと抑え、口元にある手を必死に押し付ける。集中するなと思っているのに、シャワーの音なんか聞こえず、左馬刻の声が鮮明に聞こえる。くちゅくちゅと扱いてる音すら聞こえる。自分の大好きな声とエッチすぎる音に頭が焼かれそうだ。

「っ...いちろ」

「は？」

しまったあああ。俺の名前が聞こえ、思わず声が漏れてしまう。冷や汗というよりも脂汗に近い汗を感じながらも口と胸を抑える。シャワーの音が止まったのかどうかも分からない。急いで立ちたいのに、腰が抜けているし、何なら愚息が反応してしまっている。そんなことを

考えている最中、つまり声の1秒後にスパーンと扉が開けられる。

「何してンだ、てめえ」

「...よ、よお」

先生が治療しようと提案してきたが、断り優勝でスポットライトを浴びている先生たちを尻目に、3人で医務室に向かう。なんで医務室か、それは初戦にさかのぼる。

中王区は男性嫌いの集まりで、こんな見世物を提案しとながら、治療はしないと手紙にはあった。しかし、あのクソ偽善者とのバトルの後に、ねえと言われていたはずの医務室に、クソほど偉そうなウジ虫が案内してきた。

中王区に治療されるなんざ、死んだ方がマシだと医務室の前で怒鳴っていると、うるさいと聞き覚えのある声がしたのだ。

「うるさいんだけど、3人が寝てるの分かんない？」

「うち。ンであいつ居んだよ」

「あんたが唇噛み切って、ぶっ飛ばしたんでしょ」

「うち。つつーかよ、見てたンか」

「私居なかったら医務室なんかありませんけど」

「おい、左馬刻。この人誰だ」

「あ？あー、...コイツには逆らわねえほうがいい」

「左馬刻が弱気とはな」

「おい、そのドグソ野郎外に出せ」

「だったら、左馬刻を気絶させて6人仲良く治療させるけど」

「うち。コイツ無事なのかよ」

「心配すんのか喧嘩すんのかどっちかにして。」

「ふむ、治療...と言ったな。神宮寺 寂雷のラップスキル無しでか？」

「言の葉党は知らないけど、私も似たスキル持ってるの。」

「何故、知らないんですか？」

「...ひきこもりたいから。いずれひきこもるんだから内緒にしてね！！」

「しかしバレるのではないか？」

「はあ。私のアビリティは、自分に使えない代わりに負傷箇所の完全回復ができるの。その過程で、マイクでの疲弊を回復できる。逆に、悪化させることも出来る」

「なっ！」

「なるほど。理解した。」

「回復できたんだな」

「悪化でしか使わないからね。ラップバトルの予算見たら、回復考えてないの分かって、寂雷に回復させるまで手当てするって目的で、勝ち取ったんだから。あ、次のバトル終わってから来てね」

と言うわけだ。何なら優勝賞金の件でかは知らないが、機嫌は相当悪そうだった。ここで医務室に行かなければ、情報も手に入らなくなるし、百害あって一利なしだ。じゅーとに鍵を渡していたのなんざ知らず、ほぼ完全回復した身体で部屋に帰った。

今回、先生んところは強かった。相手を称えんのと、なんで負けたのか考えるのは別だ。何本目か分からないタバコを吸いながら考える。俺が本調子じゃなかったのかも

しれない。ずっと一郎の顔が頭をちらついた。後は、信用度もあるだろう。俺らは利害で一致していて、負けたら俺の機嫌が悪いからと思われているだろう。あっちは、リーマンが異常に怯えてはいたが、乱数との戦いで大丈夫だと思ったんだろう。バトルに100%集中できる分、あっちの方が強かった。部屋に煙を吐き出す、明日の朝一にコーヒー淹れてやって、思ってることを言おう。信用で負けるなんざ2度とごめんだ。タバコを灰皿に押し付ける。冷たいシャワーで頭を冷やそう。

シャワーを浴びている最中、中王区へ来てから抜いてない自分のものがたっていた。溜まってんのかと適当にしごくが全くイケる気がしない。その時、何故か一郎の俺だけを誘うフェロモンの香りと気持ちよさそうにしている顔が頭に浮かんだ。

あんなクソ偽善者で抜くなんざ不本意だが仕方ない。頭に思い浮かべただけで、腹につくほど立ち上がるものに最早怒りを乗り越えて笑えてくる。気持ちいい、一郎が拙いながらに舐めてくれていた顔を思い出すと我慢汁まで出てくる。1人でやって出んのか、と思いながら、わざと音を立てることで一郎への想像を掻き立てていると、名前を呼んでしまう。

「は？」

とうとう幻覚まで聞こえんのか、と思ったがシャワーを真っ先に止め、逃げられてたまるかと扉を開ける。

処女かというほど真っ赤になった顔と、あまりにも女々しいが、口と胸を押さえている初心さがたまらなくそそる。そのまま、口を押えている手を引っ張り風呂場に連れ込む。

「さ、左馬刻...？お、俺何も聞いてな...」
「あゝ？サン付けろやドグソ野郎。つつーか、あんな顔して、無理あんだろ。」
「ど、どんな顔だよ」
「あ？俺が欲しくて欲しくて堪らねえって顔だよ」
「し、してねえ！！」
「無理があんだよ。ンな人を誘う匂いもしてやがンのに」
「は？俺ヒートはまだ二ヶ月」
「知ってるわ。先月来てンだろ」
「なんで知ってんだ...覚えてんのかよ」
「何、当たり前のこと言ってンだ」
「...なんで番解消しねえんだよ」
「あ？して欲しいのかよ」
「こんだけ殺し合ってたぞ！」
「番つつーのは、一生モンだろ。てめえが裏切ったとしても、クソ偽善者でも一生モンを貰ってンだ。」
「何言って」
「番の解消つつーのは命掛かってンだ。てめえをぶち殺してやりてえのは変わんねえ。こんなことで命奪いてえわけじゃねえんだ」
「意味わかんねえよ！」
「てめえは、sランクのα様が良いのか」
「違う」
「ンじゃあ死にてえのか？」
「ンなわけねえだろ！！」
「なら言ってんな。てめえが合飲にしたことは許せねえし、ぶっ殺してえ。でもな、番を解消すんのは別だ。仮に死ななくても衰弱すんだろ」

言葉が不器用で、伝わりにくいし、口数が多い方でもない。でも、左馬刻...碧棺 左馬刻という人物は、いざというときは、冷静でキチンと大切なことを教えてくれる人だった。一郎の基礎となる事や大切なことは全部この人に教えてもらったのだ。

「...ん？合飲ちゃん...？」

「あ？何しらばっくれてんだ。」

「あんた何言って」

「てめえが何言ってんだ。まあいい。折角来たんだ、抱かれろや」

「嫌に決まってるだろ！！今日はイケブクロには手を出さないでくれって言いに来たんだよ」

「だったら尚更だな。頼み方一つーもんがあんだろ」

「...左馬刻が言ったんだろ。魂は切り売りできるほど安くねえって」

「ははっ。その通りだな。いいぜえ聞いてやンよ。」

「ちんこ立てた状態で言われてもな」

「相手したいなら最初っからそう言え」

「ちがっ！！」

「あ？ちげえなら触れるべきじゃなかったな」

「今のなし！」

「ダメに決まってるだろ」

「ここ、中王区のホテルだろ！」

「風呂場なら許されンだろ」

「風邪引くっての」

「ッチ。てめえ今すぐヒート起こせや」

「無茶言うな」

「...しゃーねえ。抜き合うか。てめえも勃ってるしな」

「ちよっ」

「俺以外のやつに言ったら犯されてっからな」

「っ...！」

「今度のヒートから、あの部屋来い」

「は？やらないって」

「ヒートで放置してっ方がやべえだろ」

「なんか抑制剤のおかげで助かってっから」

「あ？てめえもかよ。じゅーととりおーに聞いたが、んな抑制剤は聞いたことも見たこともねえってよ」

「は？現にあるだろ」

「まあな。ンないつ無くなるか分かんねえ怪しいものに頼るよりはヒート中くらいは会ったほうが良いだろ」

「っ…」

「おら、やんぞ」

自分が原因とは言え易々やられたくはない。さっきの自慰の声をまだ聴きたい気もしていて、気が付くと一郎はとんでもない提案をしていた。

「あんたの気持ちよさそうな声聞かせてくれんなら」

「っ…ははっ。いいぜエ。てめえ、俺の声好きだもんな」

「ちがっ…今のは」

「いいつつてンだろ。おら、だったら啜えろよ」

「口が滑ったっつーか、なんていうか」

「口滑ったんなら思ってたンだろ。喉奥に突っ込まれたくなきゃ黙ってやる方が賢明だぜ」

ヒート中、ごくたまに見たラットを起こしている顔をしている。孕ませたいと全身で言っているような全部喰われそうな顔をしている。このままだと、犯されそうだと一郎は思う。誘発フェロモンが出ていないからヒートになってはないけど、左馬刻のものが見えて一郎は喉元を動かす。そして、バスタブに座ってる左馬刻の足の間に座り、教えられた通りに一郎は左馬刻のものにキスをすると満足そうな顔で頭を撫でられる。つい今週殺し合いをステージでしていたとは思えない、一郎の第二性が飲

喜の声を上げている。ゆっくりと先だけを咥えると、まだ余裕そうな顔をして褒めながら頭を撫でてくれる。左馬刻は左馬刻で、浮気したりもせずに自分に染まっただけでいる一郎にすっかり興奮している。お互いなんて殺し合いするほど憎んでいたかは忘れないし、許す気も今はないけれど。

ゆっくり楽しみたい気もするが、一郎は服を着ていてシャワーは止めたが濡れてはいる。早く終わらせるに越したことはないだろう。

「おい、ちょっと耐えろよ」

撫でていた手を離し、両手で頭を掴むと、喉奥に押し込む。喉奥に入れないって言っただろって文句を言おうにも、左馬刻のものがでかすぎる。噛まないようにするのに必死で、好き勝手に動くことを許可する。

「っ...は」

約束を違える気はないようで、きちんと聞きたいと言った声は聞かせてくれている。ああ、やっぱりこの声が好きだと左馬刻の気持ちよさそうな顔も焼きつきたくて一郎は目だけ上を見る。すると、目がぱちっと合う。

好きな顔と声と、向けられた目で、一郎は自分がいったことに気付く。左馬刻は、一郎の目と顔が蕩けていて、持っていかれそうになったのを耐える為に真下を見る。

「あ？てめえ、舐めただけでいったンか」

「っ...ん”」

「ああ？舐めてっから答えられねえよな

っ...はあ。もう少し耐えろよ、いい子だから」

一郎の体調を心配して、早漏と言われるよりもイク方を優先し、もう少し奥にいれると、一郎は苦しうに喉を締めてくれる。

「っく...イク...っ」

喉奥に出すのはマズイと思っていたのに、締め付けが凄くてイってしまいが、一郎の目の奥に♡が浮かびビクビクとなったのに気付く。出した様子はない、コイツ喉に出されてメスイキしたんかと左馬刻は征服欲で心が満たされる。一郎は、反射的に飲み込んだようで、いつものように口の中に無いよと見せる。

左馬刻は喉を鳴らし、一郎を抱え上げ、浴室の外に連れ出し、乱暴に服を脱がせ自分と一郎をタオルで丁寧に拭く。そして、ベットに連れていきゆっくりと下ろす。

「約束守ってやれなくて悪い。後から聞いてやる」

翌日

「信じらんねえ！！」

「あ？てめえがエロいのが悪い」

「今日、中王区出るんだぞ！！誰がホテル片付けんだよ」

「まあ、なんとかかなんだろ。」

「入間さんと毒島さん来んじゃねえの！？」

「あ？てめえのそんな姿見せてたまるか」

「そ、それなら、なわけあるか！！」

おい、片づけるぞ」

「あ？めんどくせえ」

「中王区が怒るだろ！」

「怒らせとけよ」

「あの人が怒られんだぞ」

「ホテル一緒にした時点で、sexしてもいいですよってことだろ」

結局、この後寂雷に呼ばれ片付けることなく向かうことになった。寂雷からはより戻したんですねなんて言われながら、招待席にいたとかいう2人の話を聞く。そのころ、MTCの2人は左馬刻を呼びに行った部屋に入り、情事の後が色濃く残っているのを見て、銃兎は胃を痛めることになった。

銃二

何時だったか、本当にたまたま見つけてしまったあのクソ警官と俺のnmnm。俺のファンアートを送ってくれる人と似た絵柄が回って来たのだ。なんで自分が可愛く見えるのか分からなかったが、普段ファンアートを書いている人がサブ垢でもファンアートを書いてくれるのは嬉しかった。そこで、こそっとプロフィールを見てしまった。そこには、zyzr/nmnmと書いてあった。zyzrとはなんだろうと検索してしまったのが運の尽き。汚職警官と俺がキスしている画像が出てきた。は？有り得ねえと思ったし、誰が書き始めたんだとも思ったが、絵は全員素晴らしくて、結局見てしまった。そうになると、好奇心旺盛な男子高校生としては毎日見てしまうわけで。まだ成人向けのものは年齢が年齢なので出てこないが、男女が付き合うと、そ、そういうこともい、いずれするのは知っていて、それが、こ、こどもを作る行為なのも知っている。男性同士は、こどもが出来ないからしないのか？とも思ったが、気持ちいいからやせ、性欲でと言うのも聞いたことがある。男性の方が性欲は強い...と思う。そうになると、男性同士でもするのだろうか？

そういう興味も必然的に出てくる。どう調べていいかもわからない。やっぱり現実的には出来ないのか？など悶々としながら、最早日課となったzyzrを見る。すると、何故か俺と汚職警官が赤ちゃんを抱っこしている絵が出てきた。いくら、知識が無くても男にこどもが作れないことくらい知っている。

タグに、男性妊娠/オメガバースと書いてあった。だ、男性に...妊娠は意味は分かる。ただ、オメガバースの意味は分からない。そこで、オメガバースを調べてみる。三郎が聞いたら、その意欲を勉強に活かせというだろうが、前から男性同士でやれるか気になっていたのだ。すると、オメガバースは男性が濡れる？ようになり、どういう仕組みかは分からないが、妊娠できるようにするものらしい。つまり、身体は変わっていない。ということは、オメガバースでなくても男性同士でやるのかもしれない。ど、どうやって...やるんだろう？

検索するのは恥ずかしかったしバレたくなかったので、シークレットモードで、男性のやり方を調べてしまった。どうやら、ケツの穴を使うらしい。しかも、それはそれは丁寧に、洗浄の仕方まであった。

すると、健全な男子高校生、気になるもんは気になるのだ。じょ、女性ではなく自分一人で出来るし、と内容を覚える。駄遣いをして兄貴や三郎に迷惑をかけるわけには行かない。ハンドクリームなどで代わりはできるみたいだし、ハンドクリームならかなり持ってる。シャワーで中を洗うが、洗いすぎは良くないらしい。

開いてもない中を洗えるのか。気になることは多い。でも、誰もが気になるであろう、そこは書かれていなかった。その日から、ケツを使って1人でするようになってしまった。正直、最初は鬼のように痛かったし中は洗えてなかったり失敗も多かった。

今日も今日とて、後ろを洗浄しベットでいそいそと1人でやっているときに、部屋がノックされた。

「ど、どうぞ！」

「悪い、今日俺ちょっと夜に依頼入っちゃって」

「もう夜だけど」

「そうなんだけど、入間さんから依頼が来て」

なんだ、この同人誌的な展開は、と思ってしまう。まあ、こんな本読んだことねえけど。

「断ろうと思ったんだが、相当困ってそう。入間さんのとこ寄って行こうにも遅くて」

「俺行くよ！」

正直、最近はその警官と俺とのキスを見て後ろでやっているため気まずいが、困っているならそんなことも言ってもらえない。

「助かる。なんでも料理を作ってくれたいんで」

「横浜だよな？」

「ああ。俺も横浜だから送っていく。遅いから断ろうとしたら、泊まっていいたいから明日迎えに行く。」

「俺でもいいって？」

「ああ。」

「それならもう行くんでしょ？」

—————

一郎は俺様、何様、左馬刻サマに呼ばれているだけなのだが、なんせ俺様、何様、左馬刻様なので、遅れていくのは厳しい。銃兎はそれで二郎が来るのが目的なので、左馬刻から聞いて真っ先に依頼を入れた。

そんなことを知りもしない二郎は、一郎の運転で銃兎の家に着いてしまった。もちろん、銃兎もまさか自分とのBLを見て、しかもアナニーしてるなんか知っているわけないのだが。

「ああ。弟クン。遠かったでしょう、来て早々申し訳ないですが、ご飯を作っていただけると。そういえば私、食べたいもの言ってませんでしたね。一緒に買いに行きましょう」

「え？ああ。買ってきてなくてすみません。」

「どうしたんですか？そんな素直で。」

そういえば、あなた今日泊まるんでしたね。では、私が買ってきますので慣れててください。」

そういうと、銃兎は部屋を出た。最初は掃除をしようと二郎は動こうとしたが、なんせ最近は入間銃兎と自分のキスシーンだけでなく、こどもを授かったものまで見ている。

も、もしここで、キ、キスなんかされたらと、胸がうるさくなり、無意識に唇を撫でる。さっき抜けてなかったのもあり勃起あがってきたのを感じる。そういえば、オメガバースでは匂いに着目していたなと二郎はクンクンと鼻を動かす。この部屋からはタバコの臭いに混ざり、香水のいい香りもする。すると、更に勃起あがってしまう。どれくらいの時間が経ったか分からないが、数日分の食料を買うなら、まだまだ掛かるだろう。しかし、汚すわけには行かないと思い、ティッシュを探すが無い。トイレでやるしかないのかもしれないと二郎は考えるが、なんせトイレでしたことは無い。少し探してみようと探す、何処にもない。あいつ、1人でやらねえの！？俺らのBL書いてる人たち！！あいつEDです！！とまで心の中で二郎は叫ぶが、本当に無いもんは無いのだ。同人誌ではこどもすら作ってるのに、29歳の性欲

はこんなに無いのかと二郎は絶望する。まあ、実際はでかいベッドの横にある引き出しの中にコンドームもティッシュもあるのだが、なんせその発想がない。リビングにもあるにはあるが、MTCが宅飲みするので見えるところには無く、TVの下にある。しかも、埃を被らないよう、ご丁寧にティッシュケースの上を閉じれるもので置いてあるので、仮に開けても知らなければ分からない。そして、山田家はそんなもんは無い、箱なら箱をドカンと置いてある。軽く探ただけでは見つからないので、二郎は勃っていて辛くなり、床に座り込む。早くしないと銃兎が帰ってくるだろう。こうなりゃ自棄だ、と近くに置いてあるタオルをお借りする。そこからは、なんか良い匂いがする。もうロクに頭も回っていないため、その匂いを嗅ぎながらズボンを下ろし、後ろに指を入れる。一回、抜くと汚れてなかったので洗浄は上手くなったのだろう。

先程1本は入れていたおかげと普段から使っているおかげで、この場に慣らすものが無くても入れれるのが幸いだ。前に一度、後ろでしかイケないのはマズいと前を擦ったが全くイケずに辛い思いをしたことがある二郎は、迷うことなく後ろを解した。濡れてるわけではないはずなのに、音が聞こえて、声も大きくなる。そのため、気付かなかった。

「...二郎？何してんだ。」

「っいや、これは違っ」

タオルを必死に握りしめて、後ろに指をいれていて何が違うのか分からないが、バツと指を抜く。下半身は出るしタオルもあるが、どうしたらいいか分からずに泣きそうになる。だから、気付いていなかった。銃兎が喉元を動かしているのに。

「ああ、良いんですよ。怒っていませんから」

「いや、気持ち悪いだろ」

「いえ、そうですね...私に見せながらしていただいけませんか？」

「やだ！！...はずいだろ。手洗ってくる。そんでご飯作るから」

「いえ、ご飯は明日で結構です。私とそんなにしたかったんですか？」

「は？なんでそうなんだよ」

「おや違うんですか？てっきり私としたくて後ろを慣らして待っていてくれたのかと」

「あんたと付き合ってもねえだろ」

「では付き合えばいいでしょう」

「はあ？？なんでリアルで」

「リアル？」

「あっ...」

「ふむ。そちらは後から聞きますね」

「あ、後から？」

「ええ。まずは、あなたをいたどうかと」

「俺別に、あんたが好きなわけじゃ」

「ふむ。察するに私の夢小説を読んだか、私との恋愛ものを見たとかでしょうか」

「うっ」

「まあ、そうだとでも目の前に転がっているご馳走をみすみす逃す質（たち）ではありませんので」

「そうじゃん！あんたEDなんだろ？だったら」

「あ？」

「ひっ...」

「俺がEDだと？」

「だってどこにもティッシュがねえし」

「ああ。まあ、自分で体験してみたらいいだろ。左馬刻みたいに朝までの体力はねえけど」

「生ものを冷蔵庫にいけないと！」

「ッチ。逃げたら承知しねえからな」

—————
結論から言うと、EDではなかった。言葉通り、朝までコースでは無かったし、激しくもなかったし、回数も少なかったから、歳と言えるだろうが、そんなこと言ってもらえないくらいしんどかった。まず、とにかく遅い、そしてねちっこい。文字に出来ないほどねちっこかった。zyzrを書いている人たちには悪いが、男子高校生と29歳のおっさんが話しが合うわけも、性欲が釣り合うわけもないだろ！男子高校生の性欲舐めんなと思っていたが、性欲は今のままで丁度良かった。回数が稼げないからとは言わなかったが、回数が稼げないからイク前に何回もいかせようとするし、色んな所にキスもされた。恋愛経験0の男子高校生からしてみれば、うっかり惚れても仕方ない。惚れてはないが。

そんなことを考えていると、隣にエッチ警官が居ないことに気付く。立って探しに行こうにも、起き上がれる気も全くしない。

兄貴が迎えに来ると言っても依頼はこなせていないから、論外だ。どうにかしなきゃと、思っていると淫行警官が入ってくる。

「一郎クンのお迎えは断りましたので、ゆっくりしててください」

「h...！！」

「ああ。声でないんですね。酷くしすぎましたか。まあ、これでEDではないと分かっていただけましたか？」
頷くしかない。結局、夕方過ぎに治り依頼もこなし、もう一泊余儀なくされ、この日のエッチが忘れられず惚れていくのは、また別のお話。

あとがき
わーーーーい！！！！10日に、あー攻めが自慰してん
のみてえと思い、1個投稿したのに、もう一冊書き始めてしまい、終わるか冷や汗ダラダラでしたが、なんと！！書き終わりました。パチパチ
ルンルンであとがき書いてます。
結局こっちのサンプルなんか2日しかないので投稿している余裕なんかなく、、

これから、Y@腐 あまり無いCPサークルは一次創作の投稿を決め、誰でも手に取りやすい本を、なろうか何処かにあげていこうと思っているので、もう一冊の後日談投稿とともに二次創作は亀になると予想されます。
しかし、kmtの二次創作も書く予定で、ヤクザが居たりするマイクの人たちが必要でクロスオーバーにして二次創作を生み出したりする予定もあるので、二次創作を書

くのをやめたりはしません。元来、別のアイドルコンテンツで同人活動をしている畑違いですが、サマイチとkmt、アイドルコンテンツは思いつき次第、書いていくつもりです。

また、一次創作を制作しているだけで、書き手から消える訳でもありません。

サマイチや銃二はこのイベントが初ではありますが、今後もあまり無いCPサークルのY@ooならびに二次創作を見てくださると幸いです。

今回は、初書き初参加にも関わらず、参加させていただきありがとうございました。

また、閲覧もありがとうございました！

この無配を手にとってくれた人ならびにもう一冊取ってくださった方に幸運が訪れますように

2025.9.12 Y@腐 あまり無いCPサークル